

## ICTを活用した小学校英語教育 —スカイプを使用した事例研究を基に—

高橋 美由紀\* 大野 直子\*\* 松田 孝\*\*\*

\*教職実践講座

\*\*グローバル・コミュニケーション&テストイング

\*\*\*小金井市立前原小学校

## English Education for Children Using ICT —A Case Study of Using of the Skype—

Miyuki TAKAHASHI\*, Naoko OHNO\*\* and  
Takashi MATSUDA\*\*\*

*\*Department of Practitioners in Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan,*

*\*\*Global Communication & Testing Co., Ltd.*

*\*\*\*Koganei municipal Maehara Elementary School*

### Abstract

This article discusses effective practice in applying ICT to elementary school English education programs. Firstly, it briefly reviews the compatibility of ICT with the theoretical background of English education and the education policy of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. The article then discusses the implementation of an ICT-supported English education program at 'A' elementary school in Japan. For example, it discusses the measures taken by the school to establish an ICT- and student-friendly English learning environment with the installation of Wi-Fi, the utilization of 'Skype', the ALT program and the introduction of one-to-one tablet usage for students. A full account of the educational practices and content of classes is given. Finally, observation reports of lessons are discussed and evaluated along with the TOEFL Primary® results of the learners. The study concludes that ICT-supported English education through the utilization of assistive and adaptive technologies such as Skype and tablets is an excellent way forward for elementary school English education.

### 1. はじめに

新学習指導要領において、子ども達の育成すべき資質・能力を育むために、これまで「個別の知識・技能」が主体であった教育から、それらをどう活用するか（＝思考力・判断力・表現力等）、そして、それらの学習に向かう積極的な態度（＝学びに向かう力、人間性

等)が求められている。そして、子ども達が「どのように学ぶか」についても光を当てる必要があるとの認識のもと、「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び(いわゆる「アクティブ・ラーニング」)」について提起された(文部科学省2015)。その手段の一つとして、ICT教材の活用は、「子ども達の学習への興味・関心を高め、分かりやすい授業や子ども達の主体的・協働的な学びを実現する上で効果的であり、確かな学力の育成に資する」と述べられており、ICT教材は、全ての教育に有効な手段とされている(文部科学省2014a)。

本稿では、「グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言」(文部科学省2014b)の趣旨を活かし、小学校英語教育において、子ども達のコミュニケーション能力や英語の技能を育成するためには、ICTを活用することが効果的であることを筆者らの行なった事例研究を基にして述べる。はじめに、英語教育の理論的な背景と文部科学省の教育政策やCurtain & Daulberg (2010、2016)の研究から、既にICTが子ども達の日常生活に自然に取り入れられている環境であることや、ICTを学習に活かすメリットについて述べる。次に、T市A小学校での英語母語話者(ネイティブ講師:外国語活動のALTではなく、英会話での指導者)とのSkypeを活用した授業の事例研究について具体的に述べる。最後に、この学習の効果について、教師の観察評価とTOEFL Primary®を使用して評価をした結果について述べる。また、タブレットやSkypeという教育機器が児童の学びのassistive & adaptive technologyの好例であったことについても述べる。

## 2. 先行研究

### 2.1 文部科学省の英語教育改革とICTの活用

文部科学省は、「初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図る。」ことを目的として「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を進めている。そして、学習者が積極的に英語を使おうとする態度の育成が求められており、その手段として、ICTを効果的に活用することによって教育上の効果が期待されている(文部科学省2014b)。

「グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言」(文部科学省2014b)では、「改革2. 学校における指導と評価の改善」において、「英語学習では、とりわけ話したり書いたりする場面において、失敗をおそれず、積極的に英語を使おうとする態度を育成することが重要。互いの考えや気持ちを英語で伝え合う言語活動を中心とする授業を行うため、中・高等学校では、生徒の理解の程度に応じて、授業を英語で行うことを基本とする。」ことや、「各学校は、学習指導要領を踏まえながら、4技能を通じて「英語を使って何が出来るようになるか」という観点から学習到達目標(例:CAN-DO形式)を設定し、指導・評価方法を改善する。」ことが示された。また、「改革4. 教科書・教材の充実」では、「小学校高学年で教科化する場合、学習効果の高いICT活用も含め必要な教材等を開発・検証・活用する。」ことをはじめとして、「教科書を通じて、説明・発表・討論等の言語活動により、思考力・判断力・表現力等が一層育成されるよう教科用図書検定基準の見直しに取り

組む。」こと、及び「国において音声や映像を含めた『デジタル教科書・教材』の導入に向けて検討を進める。」こと、また、「ICT予算に係る地方財政措置を積極的に活用し、学校の英語授業におけるICT環境を整備。」が掲げられている。

一方、小学校においては、高学年では教科としての英語教育が導入され、学習時間が週1時間（1時間＝45分）から週2時間となる。また、中学年では外国語活動として新たに週1時間導入される。そして、この時間増となる時数を確保するために、10～15分程度の短い時間を単位として、積極的にICT等の活用をしながら繰り返し教科指導を行う短時間学習（帯学習、モジュール学習）等を含めた柔軟なカリキュラム設定が求められている（文部科学省2017）。また、英語教育に関する教科書・教材の充実について、ICTを活用することを挙げ、「先進的な取組を行う学校では、タブレットPC、PC、電子黒板、テレビ会議システム等を活用し、教室内の授業や他地域・海外の学校との交流において、意見交換・発表等の互いを高め合う学びを通じて、思考力・判断力・表現力等を育成する取組が行われている。」ことや、「公立学校におけるICTの環境整備と活用は、一部の学校・地域では進んでいるが、全国的には十分とは言えず、ICTの環境整備の充実を一層促す必要がある。教育の情報化の推進については、「第2期教育振興基本計画」（平成25年6月14日閣議決定）で目標とされている水準の達成に必要な所要額（平成26年度から4か年にわたり総額6,712億円）を計上した「教育のIT化に向けた環境整備4か年計画」に基づき、地方交付税措置を講ずることとしている。地方交付税の用途を国が制限することはできないが、ICT環境の整備は、英語教育への積極的な活用という観点からも重要であり、各地方公共団体において、国の計画を踏まえた積極的な予算措置が図られることが期待される。」ことが言及されている（文部科学省2017）。以上のことから、ICT教材の活用は日本の英語教育にとって有効であり、文部科学省が公立学校におけるICTの環境を積極的に整備する方向性が認識される。

## 2.2 ICT活用の意義と効果

第二言語教育や外国語教育におけるICTを活用する意義については、①音声指導に役立てることができる、②教室に持ち込めないものを提示できる、③人工的なシミュレーションで練習ができる、④幅広いアウトプット、例えば、実際の会話が画面でできる等がある（柳 2011:114-117）。また、Roblyer and Doering (2010) は、英語や外国語の学習にICTを活用するメリットとして、以下の10項目の観点を挙げて効果があることを言及している。① Images downloaded from the internet help illustrate language concepts、② Interactive storybooks support language acquisition、③ Interactive software and handheld devices provide language skills practice、④ Presentation aids help scaffold students' language use、⑤ Websites offer exercises for students to practice subskills、⑥ Virtual collaborations provides authentic practice、⑦ Virtual field trips provide simulated experiences、⑧ Word processing、⑨ Language labs support language acquisition、⑩ Web-based, authentic content (Roblyer and Doering 2010:304)。さらに、指導内容として、“teachers can use voice and video chats to communicate authentically with native speakers or members of the language community using free tools such as Google Chat, Skype, and more.” (Curtain & Dahlberg 2016:381)と述べられている様に、コミュニケーション能力育成の英語

教育にはSkype等の活用は効果的であると認識できる。

### 3. 本研究

#### 3.1 本研究の概要— Skypeを取り入れた英語活動の展開

本研究では、「ICTの活用が子ども達の英語コミュニケーション能力の育成に有効である」という仮説を立て、A小学校6年生の子ども達が、ALT（英会話学校のネイティブ教師）とSkypeを使用した活動を行なうことを試みた。そして、子ども達の英語コミュニケーション能力として、リスニング・リーディング・スピーキングについてTOEFL Primary®で測定した。A小学校では、ICTの先進的な取組みを行なっており、子ども達に「学ぶ事への集中力」、「人前で発表する力」、「協働学習のやり方」などを習得させることを目的とした教育を実施している。

#### 3.2 本研究の対象—T市A小学校の英語活動概略（平成27年度）

A小学校では、平成23年10月より一人一台のタブレット端末を活用した教育実践を積極的に推進している。校内Wi-Fiも整備されていたため、Skypeによる英語活動導入に必要なインターネット学習環境整備が整っていた。そして、実際の外国語活動においては、子ども達の実態から外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむことやコミュニケーションの楽しさを体験させることを重視したいと校長（当時、松田孝）は考えていた。

一方、平成23年度頃から、e-Learningとしてのオンライン英会話に注目が集まり、ベンチャー企業などが様々なサービスを展開し始めていて、個人ユーザーの獲得とともに学校教育における自社サービスの活用の可能性を探っていた。そして、これらの条件が上手く噛み合い、A小学校は平成26年に、「株式会社Best Teacher」との年間11回のSkypeを活用した外国語活動を導入した。なお、この企業は平成24年5月からSkypeなどの無料ソフトを使用して、インターネット上で英会話レッスンを受けるといった「英会話の学習スタイル」によるサービスを提供している。この企業が提供している「オンライン英会話Best Teacher」のレッスンには、①自分が話したいこと（＝自分の英語）を英語でまずは書いてみる「Writingレッスン」と、②作成した英文を使ってSkypeで会話の実践をする「Skypeレッスン」の2種類がある。今回、子ども達に使用したのは、②のSkypeレッスンであり、このレッスンの前に予習として①のWritingレッスンで作成した語彙や英文を使った。その後、②SkypeでALTとオンラインで英会話を行った。このプログラムの講師の出身国は、アメリカ、イギリスなど40カ国以上にも及んでいる（Best Teacher 2017a）。なお、「オンライン英会話Best Teacher」のレッスンの様な、オンラインを活用して行なわれる英会話学習の特徴としては、場所や時間を選ばないメリットはあるが、映像を通じてのコミュニケーションでは、直接対面して話をする場合と比較してコミュニケーションの臨場感が低くなってしまふといったデメリットも生じている（オンライン英会話2017）。

A小学校の外国語活動は、「積極的に外国語を聞いたり、話したりすることでコミュニケーションを図る楽しさや言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さ」（学習指導要領）等を体験的に学ばせることをねらいに、年間35時間、「Hi, friends!」の内容に準

拠する形で外国語活動の指導計画を作成し、授業実践を行なった。そして、原則月4回の授業の内、T市教育委員会が予算措置として委託業者より年間11回ALTを市内学校に派遣していたため、1回がALTとのチームティーチング、2回は外国語活動専科の担当教員による授業、そして残り1回がSkypeを活用した授業の実施となった。この授業では、帰国子女である1年生担任の女性教員（教員経験3年目）が外国語活動専科として指導にあたった。（外国語活動と1年生の授業を交換する形式である。外国語活動の時間には1年生学習指導ができないので、外国語活動を外国語活動専科教員に指導してもらっている他クラスの担任が彼女のクラスの授業を行った。）また、Skypeを活用した授業でも、この外国語活動専科の担当教員が指導にあたった。

### 3.3 本研究の参加者

本研究では、小学校5年生と6年生にSkypeを活用した活動を行なった。また、TOEFL Primary®のテストについても、5年生・6年生共に受験した。以下は、各能力を測るテストの受験者数である。

表1：TOEFL Primary®各能力を測るテストを受験した学年毎の児童数

	リスニング	リーディング	スピーキング
5年生	10名	11名	7名
6年生	14名	15名	13名

### 3.4 データ収集方法（観察データ、TOEFL）

データについては、外国語活動専科教員の指導者側から観察した児童の学習過程の様子、及び、TOEFL Primary®を利用して、リスニング、リーディング、スピーキングの3技能を測定した。

### 3.5 Skypeを活用した外国語活動の実際

表2は、Skypeを活用した外国語活動の6年生の11回分のレッスン名とその内容である。この年間計画をもとにして、Skypeを活用する授業に焦点を合わせて、各々の單元ごとに、ALTとのチームティーチング、外国語活動専科の担当教員による授業、Skypeを活用した授業を行なった。

第1回は、子ども達が初めてSkypeを使うための準備の授業であり、第2回目からは外国語活動の教材である"Hi, friends!"の授業内容に沿った形式で実施した。これらの授業では、外国語活動専科教員による1単位時間の指導案とともに、子ども達にも授業のストーリーとアウトラインがわかる資料を作成し、それを大型モニターに映し出して行った。なお、ストーリーとアウトラインは、概ね「タイトル（活動）—今日学ぶこと（ねらい）—今日のフレーズと内容（具体的な発話）—まとめ」の内容で構成した。

これらの授業の基本的な展開は、導入15分、展開15分、まとめ15分とした。導入では本時で学ぶ単語をインプットした。そして、Skypeで実際に話すネイティブ講師との会話に向

表2：年間活動計画（6年生）

回	Lesson名
1	Let's start! -Skype を使ってみよう
2	Do you have "a"? -アルファベットクイズをつくろう
3	When is your birthday? -友だちの誕生日を調べよう
4	I can Swim. -できることを紹介しよう
5	Turn right -道案内をしよう
6	Let's go to Italy -友だちを旅行に誘おう
7	What time do you get up? -一日の生活を紹介しよう
8	We are good friends. -オリジナルの劇をつくろう
9	What do you want to be? -「夢宣言をしよう」
10	Let me introduce myself. -自分のことについて英語で話してみよう
11	授業公開（1年間のまとめ）

けて、外国語活動専科教員と子ども達及び、子ども達同士でフレーズの練習を何度も行った。その後、実際に Skype を活用してグループ3～4人で一人のネイティブ講師とコミュニケーションを行った。実際の会話時間は15分程度であったが、子ども達がネイティブ講師とのコミュニケーション活動を積極的に行えるように、活動の中にゲーム的な要素を取り入れた。また、Skype を活用した授業の事前準備として、例えば、第4回「I can Swim.」では、図1の「Can you ~?」「I can ~.」を使って先生のできることを予想して先生に尋ね、自分も答えるといった内容の会話ができるようなプリントを配布して、ウォーミングアップを図った。さらに、内容にそって会話を順番に話すことができるように、数字などで書き込む等の工夫も行なった。そして、まとめの時間には、それぞれのグループの結果を子ども達が発表して、ゲームの状況を確認するとともに、本時の授業で使用したフレーズや表現を確かめて授業を終了した。

### 3.6 子ども達の反応

以下は、指導者側から観察した子ども達の学習過程の様子である。回を重ねる毎にネイティブ講師とやりとりすることに慣れるなど、彼らの学習成果が見られる。(以下の内容は原文のままである)

- ① Skype を通じてネイティブ講師とコミュニケーションを取ることに對して、児童達は当初は恥ずかしさや不安などの抵抗も見られた。しかし、回を重ねることで聞き取れなかったり、伝わらなかったりする経験を乗り越えて、次第に相手の言うことが聞き取れたり、伝えることができたりした体験が彼らの自信につながり、授業を楽しんでいる様子が見受けられるようになった。
- ② 週1回のALTによる一斉授業と Skype を活用する外国語活動では、使用する語彙数が大きく異なっていた。例えば、ALTによる授業はその時間で使用するキーフレーズを何度も

先生への質問 / 自分の答え		先生	あなた	点数
例文) Can you play badminton? / I can ( can't ) play badminton.				
Can you	? / I can ( can't )	×	○	1
Can you	? / I can ( can't )	.		1
Can you	? / I can ( can't )	.		1
Can you	? / I can ( can't )	.		1
Can you	? / I can ( can't )	.		1
Can you	? / I can ( can't )	.		2
Can you	? / I can ( can't )	.		2
Can you	? / I can ( can't )	.		2
Can you	? / I can ( can't )	.		2
Can you	? / I can ( can't )	.		2
Can you	? / I can ( can't )	.		2
Can you	? / I can ( can't )	.		2
Can you	? / I can ( can't )	.		2
Can you	? / I can ( can't )	.		2
Can you	? / I can ( can't )	.		2
Can you	? / I can ( can't )	.		2
Can you	? / I can ( can't )	.		2
Can you	? / I can ( can't )	.		2
Can you	? / I can ( can't )	.		2
Can you	? / I can ( can't )	.		2
Can you	? / I can ( can't )	.		2
Can you	? / I can ( can't )	.		2
Can you	? / I can ( can't )	.		2
Can you	? / I can ( can't )	.		2

Skypeレッスンは始まる前に先生への質問と自分の答えをシートに5つだけ埋めてください。

Skypeレッスンが始まったら、すでに書いた5つの表現だけでなく、先生と話している間に思いついたことを書いてみましょう。

Skype前に書いたことが言えたら1点、Skype中に先生への質問と自分の答えをシートに書いて話せたら2点です。

図1：事前に配布したプリント (Best Teacher 2017)

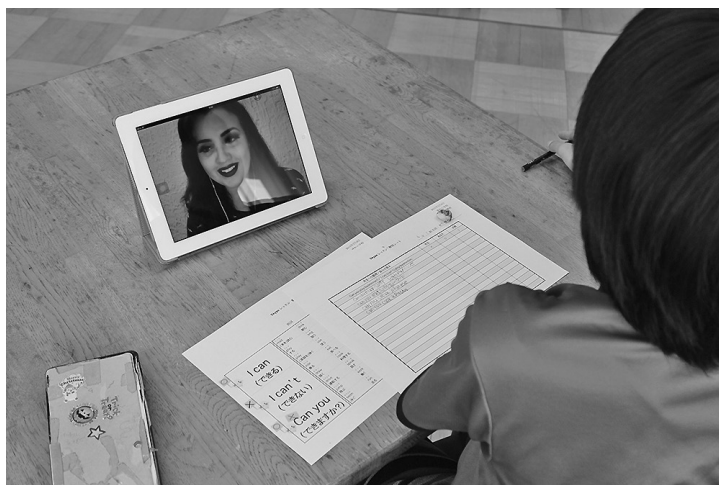


図2：授業の様子 (ICT教育ニュースより転載)

何度も繰り返し練習することが主になっていたが、Skypeを活用した外国語活動ではその時間にねらいとしているキーフレーズ以外にも、英会話で使わなくてはいけない、理解しなくてはいけない単語などが比較的多かった。そのため児童にとって難易度はALTによる授業より高かったように思われる。しかし、児童が聞きとれなくても自然と英語で聞き返す、ワークシートの中からその言葉を探するなど、「自分たちでなんとかしよ

う！」とする姿が次第に見えてきた。ネイティブ講師が一人一人の児童に丁寧に話しかけることで、児童はよく聞き取ろうとし、彼らの現在の英語の能力で精一杯答えようとしていた。「英語は難しい！」と授業前は英語に対して苦手意識があったにも関わらず、授業を進めていくにつれて自分からネイティブ講師に質問をするなど、授業に対しアクティブに取り組む児童の様子が見受けられるようになった。

- ③外国語活動専科教員は、Skypeを通したネイティブ講師と児童との会話においては、当初はスムーズに会話が進むような支援 (scaffolding) を行っていたが、回を重ねるごとに極力助けしないで、児童たちだけで会話が進められるようフェーディング (自分自身の意思や判断によって学習成果を獲得することができる取組み) を心がけるようになった。

### 3.7 Skype英語とICTの効果

Skypeを活用した授業では、3-4人が一つのグループを作って、一人のネイティブ講師と会話を行った。ネイティブ講師との会話はALTで慣れている子ども達であったが、クラス全体で1名のALTによる授業とは異なり、ネイティブ講師とグループの子ども達だけの、広い意味での「マンツーマンの授業」であった。そのため、①子ども達一人一人の発話機会が多くなったこと、②ネイティブ講師達は目の前の子ども達に合わせて彼らの理解できる表現を使用して授業を行えたこと、③子ども達の英会話を行なうことへのモチベーションが高まったことなどが効果として挙げられた。また、外国語活動専科教員が臆することなく新しい教育機器を積極的に活用することで、子ども達に「自ら学ぶ姿勢」を示すことができた。さらに、タブレットPC、Skypeという教育機器が子ども達の学びに対する *assistive & adaptive technology* であった好例であると言える。

## 4. 評価で使用したTOEFL Primary®とその結果と考察

TOEFL Primary®は、米国の世界最大のテスト開発機構ETS (Educational Testing Service) が長年にわたって培ってきたTOEFL®等のテスト開発に基づき、2014年に開発した「世界の主に小・中学生を対象とした「英語運用能力」を測るテスト」である。このテストの測定範囲はCEFRでA1～B1までとされている。その上のレベルとしてTOEFL Juniorがすでに利用されており、これはCEFRでA2～B2までが測定可能である。さらに、この上の段階である「TOEFL iBT」へとつながるテスト設計となっている。

テスト構成は、ペーパーテスト方式のリスニング・リーディングテスト (各約30分) と、コンピュータで行なうスピーキングテスト (20分) の3技能である。

スピーキングテストは、①日常生活に関連する状況についてコミュニケーションをとる能力、②感情や心境に関する基本的な表現、③簡単な依頼文および指示文、④人や物、動物、場所、動きの描写、⑤簡単な出来事の説明等を、子ども達がコンピュータに向かって話し、その内容を評価するものである。(このコンピュータで実施するスピーキングテストは、ETSの決定により、2016年12月末で終了した。) また、リスニング・リーディングテストは、英語初級学習者向けのTOEFL Primary® Step1と、英語で何らかのコミュニケーションを取れる学習者向けのTOEFL Primary® Step2の2つのレベルが設けられている。今



回、A小学校ではStep1を使用した。

結果はTOEFL Primary®スコア（Step1はリスニング・リーディングそれぞれ100-109点、Step2はリスニング・リーディングそれぞれ100-115点）、およびCEFRのグレード、リーディングについては読書能力を表すLexile指数でも評価される。一方、スピーキングテストは、0～27までのスコアで表され、CEFRのグレードはA1～B2までが測定できる。

A小学校では、TOEFL Primaryを3回に分けて実施した。はじめに、2016年1月13日にiPadを用いて、スピーキングテスト（20分）、次に、同1月19日リスニングテスト、同1月26日リーディングテストを実施した。なお、当日の欠席などもあり、受験者数は、表1に示したとおりである。

子ども達は、コンピュータを使っでの初めてのスピーキングテストに驚き、パスワードなどの入力などにも「どうしたらいいんですか?」と質問する者もいた。しかし、彼らの多くは、画面に向かって「何とか自分の知っている言葉を言ってみよう」という努力が見られた。

結果は、図3のグラフに示すように、小学5年生と6年生を比較してグラフ化した。

これらの結果を見ると、5年生と6年生のどちらもリスニング能力の方がリーディング能力よりも高いことがわかった。これは文部科学省の外国語活動の目標を踏まえた上でのA校の教育内容が「音声中心」であったことから、子ども達のリスニングの能力がリーディング能力よりも育成されていると考えられる。また、Skypeを活用した「マンツーマンの授業」で話すためには、一人一人がネイティブ講師の話す英語を積極的に聴こうとしないと話すことができないことから、彼らのリスニングのモチベーションが向上したことも要因であると考えられる。また、5年生と6年生を比較すると、リスニング、リーディング、スピーキングのいずれも6年生の方が高い評価であった。これは、外国語活動の1年間の学習効果とその差を表していると考えられる。

さらに、Skypeを活用した授業の効果については、実際にテストに立ち会った大野や外国語活動専科教員によると「数値化された結果よりも子ども達のスピーキングテストを受けている過程で、彼らが積極的に発話をしようとした態度面に現れていたと思われる。」と述べられている（大野他2016）。

一方、CEFRでのリスニング・リーディング・スピーキング評価（図4）では、リスニン

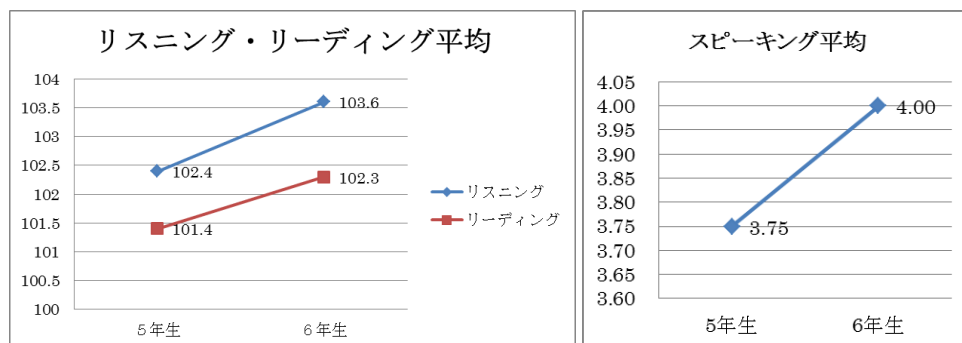


図3：リスニング・リーディング・スピーキングの学年別評価

	5年生	6年生
リスニング	A1	A1
リーディング	Below A1	A1
スピーキング	Below A1	Below A1

図4：CEFRでのリスニング・リーディング・スピーキングの学年別評価

グが5年生6年生ともに「A1」となっており、「2020年から導入される新しい英語教育」の目標としている小学校から中学校1年の「A1」レベルを既に達成していることが確認された。また、6年生ではリーディングも「A1」レベルであった。これは、Skypeの授業でネイティブ講師と話す前に、子ども達に配布したプリントによる学習効果が大きいと思われる。この活動を通して、子ども達は実際の場面で「メモ」を見るような感じで、ネイティブ講師と話しながら文字を読む活動を行なっていると考えられる。さらにまた、外国語専科教員や担任教員からは、「実際にテストを受けた時の感触よりも良い結果が出せた」という子ども達もあったということで、彼ら自身の「新たな自信」に繋がったというコメントもあった。

## 5. おわりに

外国語専科教員の子供達の観察と、上記の結果及び、TOEFL Primary®を受けている子ども達の様子からSkypeを活用した外国語活動は、効果的な指導であったと思われる。また、子ども達の「実際のコミュニケーション活動を通して、ネイティブの人々とマンツーマンで英語を話したい」「もっと英語を学びたい」といったモチベーションを向上させたことや、Skypeを活用した外国語活動を行なうための事前準備として、①語彙や表現を覚えるために、ワークシートに語彙を書いたり、それをメモとして文字を読んだりする活動や、②ネイティブ講師との会話をするために、相手の話す英語を積極的に聞こうとすることでリスニング活動を行なったことが、スピーキング能力の育成だけでなく4技能の育成にも効果的であった。したがって、このSkypeの活動だけでなく、ICTの活用は子ども達の英語コミュニケーション能力の育成に有効であると思われる。

しかしながら、今回実施できたのはこの活動を受けての1年間の5年生と6年生での能力の比較のみであった。当初、6年生のはじめと終わりの時期、2回の実施を計画していたが実施することができず、今回は1回の実施となった。今後は児童の個々人の能力の比較のためにも6年生のはじめと終わりの時期、および、この活動を行う最初の時期から6年生の終わりの時期などの比較が必要であると考えられる。

さらに、今回は、A小学校というICT教育が盛んであり、少人数のクラスでの活動であったため、この様に年間を通してSkypeを活用した授業ができた。また、コミュニケーション能力を測定するためにTOEFL Primary®を利用して3技能を測ることや、外国語専科教員による一人一人の子供達の観察等を行なうこともできた。しかしながら、これと同様の

指導を大規模校で、30人以上のクラス規模で行なうことになれば、この様なきめ細かな指導等は困難であると予想される。一方、今回の研究では、参加した人数が少ないため、この結果のみで結論を述べるのではなく、さらに、多くの人数での実践例を検討し研究を継続する必要がある。

本研究は、科研「小・中学校を通じた英語教育における流暢性に関わる言語能力育成シラバス開発」(H25～H29年度科学研究費助成金基盤研究(C) 課題番号25370659)、及び「読むこと・書くこと」の主体的協働的な学びにおける初等英語カリキュラム開発と評価」(H29～H31年度科学研究費助成金基盤研究(C) 課題番号17K03008)の研究成果の一部である。

## 参考文献

- Best Teacher (2017a) 「Best Teacher英語4技能対策オンラインスクール」  
<http://www.best-teacher-inc.com/service> 2017年9月22日.
- Best Teacher (2017b) 「第三回：子供向け英会話「できることを紹介しよう」ページ」  
<http://www.best-teacher-inc.com/academic/elementary-school/can-cannot> 2017年1月10日.
- Curtain, H. & Dahlberg, C.A. (2010) *Languages and Children: Making the Match: New Languages for Young Learners, K-8 (4th ed.)*, NJ: Pearson Education.
- Curtain, H. & Dahlberg, C. A. (2016) *Language and Learners: Making the Match: World Language Instruction in K-8 Classrooms and Beyond (5th ed.)*, NJ: Pearson Education.
- ICT教育ニュース (2017) 「愛和小学校／Skypeを使った英語授業」<http://ict-enews.net/2015/02/13aiwa/>
- 文部科学省 (2014a) 『平成26年度文部科学省白書』「第11章 ICTの活用の推進 総論」
- 文部科学省 (2014b) 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm)
- 文部科学省 (2015) 初等中等教育分科会 (第100回) 配付資料 資料1 教育課程企画特別部会 論点整理 2. 新しい学習指導要領等を目指す姿.
- 文部科学省 (2017) 「小学校における外国語教育の充実に向けた取組 (カリキュラム、教材、指導体制の強化)」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/074/siryo/\\_icsFiles/afieldfile/2016/03/03/1367634\\_5.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/074/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/03/03/1367634_5.pdf)
- 大野直子他 (2016) 「TOEFL Primary 観察記録」2016年1月13日.
- オンライン英会話 (2017) 「オンライン英会話比較」  
[http://eikaiwa.kakaku.com/online\\_english/#article01](http://eikaiwa.kakaku.com/online_english/#article01) 2017年1月10日.
- Roblyer, M.D. & Doering, A.H. (2010) *Integrating Educational Technology into Teaching* (5th ed.). Boston: Allyn & Bacon. Pearson Education.
- Takahashi Miyuki & Yanagi Yoshikazu (2015) ‘The Use of ICT in English Teaching for Children’, 発表資料、THE 10TH INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON TEACHER EDUCATION IN EAST ASIA、愛知県：名古屋国際センター、2015年10月31日.
- 柳 善和 (2011) 「ICTを利用した小学校英語教育」高橋美由紀・柳善和 (編著) 『新しい小学校英語科教育法』東京：協同出版.

(2017年9月25日受理)